



新潮文庫刊

明暗

◎夏目漱石

津田は迷宮に引き込まれるだけであつた。引き込まれると知りながら、彼は夫人の後を追撃しなければならなかつた。其所には自分の好奇心が強く働いた。夫人に対する義理と気兼ねも、決して軽い因子ではなかつた。彼は何れも同じ言葉を繰り返して夫人の説明を促がした。

「じゃ云いましょう」と最後に応じた時の夫人の様子は寧ろ得意であつた。「その代り訊きますよ」と断つた彼女は、果して劈頭に津田の毒気を抜いた。

「貴方は何故清子さんと結婚なさらなかつたんですか？」

問は不意に來た。津田は俄かに息塞つた。黙っている彼を見た上で夫人は言葉を改めた。

「じゃ質問を易えましょう。清子さんは何故貴方と結婚なさらなかつたんですか？」

今度は津田が響の声に應ずる如くに答えた。

「何故だか些とも解らないんです。ただ不思議なんです。いくら考えても何にも出て来ないんです」

「突然関さんへ行つちまつたのね」

「ええ、突然。本當を云うと、突然なんでものは疾の昔に通り越してましたね。あつと云つて後を向いたら、もう結婚してましたんです」

「誰があつと云つたの」

この質問津田に取つて無意味なものではなかつた。誰があつと云おうと余計なお世話としか彼には見えなかつた。然るに夫人は其所へ留まつて動かなかつた。

「あなたがあつと云つたんですか。清子さんがあつと云つたんですか。或は両方であつと云つたんですか」

「さあ」

津田は已むなく考えさせられた。夫人は彼より先へ出た。

「清子さんの方は平氣だつたんじゃないやありませんか」

「さあ」

「さあじゃ仕方がないわ、貴方。貴方にはどう見えたのよ、その時の清子さんが。平氣には見えなかつたの」

「どうも平氣のようでした」

夫人は軽蔑の眼を彼の上に向けた。

「随分氣楽ね、貴方も。清子さんが平氣だつたから、貴方があつと云わせられたんじゃないやありませんか」

「或はそうかも知れません」

「そんならその時のあつの始末はどう付ける氣なの」

「別に付けようがないんです」

「付けようがないけれども、実は付けたいんでしよう」

「ええ。だから色々考えたんです」

「考えて解つたの」

「解らないんです。考えれば考える程解らなくなるだけなんです」

「それだから考えるのはもう已めちまつたの」

「いいえ矢張り已められないんです」

「じゃ今でもまだ考えてるのね」

「そうです」

「それ御覽なさい。それが貴方の未練じゃありませんか」

夫人はとうとう津田を自分の思う所へ押し込めた。

日本文学 あの名場面

文学者の集いである「飯田橋文学会」のメンバー、平野啓一郎さん、田中慎弥さん、阿部公彦さん、ロバート キャンベルさん、中島京子さん、鴻巣友季子さんが神奈川新聞に連載します。



案内人

文学者 阿部 公彦

●あべ・まさひこ
1966年生まれ。横浜市戸塚区出身。東京大学文学部教授。英米文学研究と文学一般の評論を行う。主な著書に『英詩のわかり方』『英語文章読本』『小説的思考のススメ』『スローモーション考』『文学をく凝視する』『幼さという戦略』『名作をいじる』など。翻訳に『フランク・オコナー短編集』。

統御不能な

「脱線」ぶり

『明暗』は夏目漱石の絶筆となつた作品である。漱石の死に際はいかにもつらそうでも、苦しげでも、そのせいもあり、痔とはいへ病人を主人公にした『明暗』も、いかにも意味ありげな作品と見なされ畏怖の念とともに受容されてきた。

しかし、『明暗』はそれほど重々しい小説だろうか。あまり魅力的とも思えない(しかし、見かけだけはいいらしい)津田というナルシストトが、いつまでも過去の失恋にこだわりの、妻には甘え、妹には意地悪し、あげくに下心満々で人妻にいやらしくつきまとう。ただのダメ男じゃなにか…。

『明暗』を読んでいると、「他者」「内面」といった漱石ならではの深刻系キーワードがふと空々しく思えてくる瞬間がある。これ、そんなに深刻な小説？ 津田って、主人公になるほどの人？

しかし、それはフェアな読みではないかもしれない。津田は立派な売りの人ではない。まさにこのスレた感じがいいのだ。そもそも『明暗』で読まれるべきは、漱石の躍動ぶりだ。死を前にしたはずの作家の文章があちこちで弾んでもいる。

たとえば引用箇所。津田には吉川という上司がいる。その妻は世話焼きで、津田の縁談にあれこれ首をつっこむ。それなりにハンサムらしいこの男をけつこうかわいがつていゝ。この場面では津田を突つき、失恋相手・清子への未練をあげばこうとする。いや、それだけではない。清子との道ならぬ関係をけしかけてさえるのだ。

この人はいったい何なのだ。そのセリフからして、すごい。「じゃ質問を易えましょう」なんて、テレビドラマでよくやってる法廷物みたいだし、「あなたがあつと云つたんですか。清子さんがあつと云つたんですか。或は両方であつと云つたんですか」なんて、おもしろすぎてとてもリアルではないのだが、ものすごい圧迫感でぐいぐい読ませられる。

なるほど漱石にはこんな面があつたのだ。何時の頃からか真面目で深刻で、天皇陛下みたいに国民全体のことを心配する、立派な(国民作家)というレッテルが一人歩きしたが、実際には筆の勢いに任せるお調子者でもあつた。

もちろん漱石には陰気な顔もある。執念深い怖い人でもある。すごく理知的でもある。このでこぼこぶりたるや！ だから細部に読み甲斐がある。脇役の女性たちのセリフや仕草は、ときにわざとらしいほど強烈だが、漱石の統御不能なほどの脱線ぶりが輝くのもそこなのだ。

*次回(21日)、ロバート キャンベルさん。

おはようパズル ● パズル制作：ニコリ

同じの探し

①～⑫の絵のなかに、まったく同じものが1組(2つ)だけあります。どれてしょうか？ 違いははっきりわかるもので、印刷のカスレ・ヨゴレは違いに含めませんよ。

◆応募方法はがき、またはインターネットで。答え、住所、氏名、年齢、職業(学年)、電話番号を明記。応募は1人1回限り(はがきとネットの重複も不可)。

◆賞品—正解者の中から20人に図書カード(千円)、5人にニコリの「気がするに数独5」=写真=を抽選で。ニコリの大人気パズルを、1冊の中でやさしいものから難しいものまでお楽しみいただけます。

数独 5

暗簡力理ク。
難航か直関のに。